



Title	テレビ討論における発話順番取り(turn-taking) システムとコンフリクト表現の相関関係
Author(s)	本田, 厚子
Citation	大阪大学言語文化学. 1998, 7, p. 129-146
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78070
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

テレビ討論における発話順番取り (turn-taking) システムと コンフリクト表現の相関関係*

本田 厚子**

When a person is co-present with others in a certain situation, that is, when face-to-face interaction occurs, a certain kind of order is created there. This order is subject to various kinds of constraints imposed by various kinds of context related to the situation or those who are present. This study is part of a larger project which aims to elucidate how the interaction order is sustained when participants are in a conflicting situation in Japanese television *tooron*, public affairs talk shows. Previous study shows that in Japanese television *tooron*, expressions of disagreement or criticism are almost always accompanied by certain constraints that reflect interpersonal considerations toward the conflict created. These constraints vary in form from mitigation markers produced by the same person who created conflict to intervention by a third party. By using Interactional Sociolinguistics, one of the approaches to discourse analysis, as its methodology, and by comparing two sets of television *tooron* which differ greatly in forms of constraints observed, this study analyzes how these forms of considerations appeared are constrained by the turn-taking structure of each *tooron*. By doing so, it demonstrates the way the interpersonal considerations imposed by sociocultural context are differently constrained by the turn-taking system on another level. This process of disentangling

*Interrelation between turn-taking system and conflict expressions observed in Japanese television *tooron* (HONDA Atsuko)

**ジョージタウン大学大学院言語学科博士課程

gling constraints imposed in each context is essential in order to clarify the overall structure and thus the interaction order.

1 はじめに

参加者間の対立、またそこから生じる論争を主題としたコンフリクトトークの研究は、社会言語学、とくに談話分析の分野においては1980年代後半あたりから欧米を中心に多くなされるようになってきた（詳細はBrennis 1988）。一方、日本語をデータとする研究においては相互行為参加者間に生み出される協調や調和についての考察を行なうものが現在なお主流をなしている¹⁾。このような傾向の中、論争や対立を扱う研究ははまだ少数であるが、家族間、職場など特定の状況においてコンフリクトがどのように表現されるかを考察したNiyekawa (1984)、Jones (1990) 等が見られる。本考察は日本のテレビ討論をデータとし、討論参加者間に見られる意見の不一致により生じる対立の秩序を明らかにする試みの一部であり、日本語をデータとするコンフリクトトークの解明の一助となることを期待するものである。より具体的には、コンフリクトの形式と討論の発話順番取り (turn-taking) システムという二つの側面に焦点をあてることにより、日本のテレビ討論というコンテキストにおいて、討論のターン構造がコンフリクトにかかる対人関係の配慮を示す行為を拘束している事実を論証する。

2 本研究の論点

テレビ討論における参加者の相互行為に関しては、英米のテレビ討論をデータに、会話分析の手法で考察したものが先行研究として存在する。これらの研究から、参加者間の相違意見の表明に何らかの緩和表現が伴う日常会話の場合とは異なり、テレビ討論の場合、反対意見はなんらの緩和表現も伴わず即座に直接的に表明される (Greatbatch 1992) ことや、司会者は質問者 (questioner) の役割に

¹⁾ 日本語をデータとした参加者間の協調や調和の考察の代表例としては、あいづち (backchannel) (Maynard 1986) や終助詞 (Cook 1990, Maynard 1993) など特定の言語機能に焦点を当てた研究や「コンセンサス」や「集団志向」等の論理によって日本人の言語行動の文化社会的要因に言及する Yamada (1992)、Watanabe (1993) 等がある。

徹することにより中立的な立場を守る (Clayman 1988) こと等が明らかにされている。そしてこれらの研究結果より、テレビ討論における参加者の相互行為の秩序はテレビ討論という公共的 (institutional) なコンテキストによって形成されているという主張がなされている。

筆者は先に、相互行為の背後にある文化社会的コンテキストを呼び起こす言語、非言語および相互行為のシグナル (contextualization cues) (Gumperz 1982, 1992) を記述、分析することにより、日本のテレビ討論に見られる対立の場合、欧米のデータによる結果とは異なり、対立意見の表明が非明示的になされる場合があること、また明示的になされる場合にも言語、非言語レベル、または相互行為レベルにおいて何らかの規制が考察されることを例証した。さらに、それらは英米のデータを用いた上述の研究の言う公共的 (institutional) なコンテキストによる規制 (Goffman (1981a) のいう「システム拘束」) ではなく、対人関係の配慮に関わる文化相対的な規制 (Goffman (1981a) のいう「儀礼拘束」) であることを指摘し、以下のような結論に至った (Honda 1996)。

日本のテレビ討論における対立意見や批判の表明は、たいていの場合、非明示的になされる (1) か又は少なくとも (2) から (5) のいずれかひとつを伴う²⁾。

- (1) 非明示的 (間接的) 対立表明
- (2) 見せかけの同意 (賞賛、反対意見／否定的意見の否定等) による前置き
- (3) 緩和マーカー
- (4) 司会者の介入 (中立放棄)
- (5) 第三者の仲介

²⁾ ここに示すコンフリクトにかかる5種類の「儀礼拘束」のうち(1)から(3)はコンフリクトを表明した人物本人によってなされたもので、(1)及び(2)は言語、(3)は言語及び非言語レベルに表れる規制である。一方(4)および(5)はコンフリクトを表明した人物以外の者がコンフリクト表明者の発言に割り込む形で行なっているもので、相互行為レベルに表れる規制といえる。この(1)-(3)と(4)-(5)の間にみられる相違と討論との関連性については以下の分析で明らかにするが、ここでは(1)-(5)の全てはコンフリクトにかかる儀礼拘束であるという点において共通しているのであり、言語、非言語、相互行為レベルとその表れるレベルや形式が非常に異なるにも関わらず、考察した全てのテレビ討論のコンフリクト行為に何らかの儀礼拘束が必ず考察されたという点に意義がある。

このことから言語、非言語によって表される相互行為の形式 (form) とその機能 (function) の関係は一對一の固定されたものではなく、機能 (この場合、コンフリクト行為にかかる儀礼拘束) は多様な形式 (この場合、上にあげた5種類の形式のいずれか) をとりうるということがわかる。では「なぜ、どのような要因によって同じ機能が多様な形式によって表されるのであろうか?」という疑問が次に起こってくる。本論においては討論の発話順番取り (turn-taking) システムの分析考察を通してその要因を明らかにしていきたい。

3 対立に伴う対人関係の配慮

分析に入る前に、コンフリクト行為に伴う対人関係の配慮に関わる規制である「儀礼拘束」の上述5形式の例を見てみたい。

(1) 間接的対立表明

以下は、日本の経済状況に関する討論において、現在の不況の状況は「非常に重い」と発言した高橋氏の見解に対して司会者に意見を求められた際の鈴木氏の発言である。

資料1 (「不況診断」より)

- 01 司会：鈴木さん、この、金融機関の問題とか、従来経験したことのない、ま、ま、かな
 02 り重いということですけども。
 03 鈴木：(省略)
 → 04 よくあの資産デフレ だからこれは構造的な停滞だっていう人いますけどね、中
 05 身を良く調べて見るとね、僕三つ、う 四つぐらいあるんですね。
 06 (省略)
 07 ですからねー、資産デフレだから構造的停滞だっていうけど、これも冷静に見れ
 08 ばね、あの山高ければ谷深しの循環なんですね。

鈴木氏は、現状がかなり重いという高橋氏の説に異論を唱えるに際して、まず表現を「構造的な停滞」に変え、その説を高橋氏の意見として取り扱うのではなく一般論 (「よくーって言う人がいる」) として扱うことにより、直接高橋氏

を批判することを回避している。

(2) 見せかけの同意（賞賛、反対意見／否定的意見の否定等）による前置き

以下は、同じ討論における大場氏の発言に対する香西氏の見解である。

資料2（「不況診断」より）

- 01 香西：あの、ま、大場さんの言われたようなあの、なんて言うか一種の道徳的批判です
 → 02 ねえ。 その一、これは非常に説得力があるんですね、つまりバブルってのはやっ
 03 ぱり非常に いろんな不道徳一-のことが あったわけ-でしてね、えーああいう
 04 ことはもうや、いやだと いうのはもう国民みんな思ってる ことだと思います。
 → 05 ですからお話があったように 簡素な 生活というのはこれは非常に大事なこと
 06 だと思うんですけどね、しかしそれじゃあ あの、たとえば92年のあの消費の伸
 07 びが あのナチュラルな 姿であろうか っというふうに考えるとね、わたくし
 08 はやっぱり、そう簡単にはいかないと思うんです。

香西氏は「そう簡単にはいかない」（08行）と大場氏の論に対し否定的見解を述べる前に「非常に説得力がある」（02行）、「非常に大事なこと」（05、06行）と誉めている。

次の高橋氏の発言にも批判の前に前置きが伴う。

資料3（「不況診断」より）

- 01 高橋：ん、あの一、現象としましてはね、まあ、そうたいしてち、あの一、認識は違
 02 いはないんすけれども、しかし、これは償却が終われば、あの一、問題はなく
 03 なるんだからだから循環要因だってのはちょっとですわね、いい、あの、えー、こ
 04 とばあ一の遊びの様な感じがしますね。

ここ高橋氏は先の発言を「言葉の遊びの様な感じがする」（04行）と批判する前に、「そうたいして認識は違いはない」（01、02行）と互いの相違を否定している。

(3) 緩和マーカー

以下は資料 3 と同じ部分であるが、緩和マーカーの例としてあげる。

資料4 「不況診断」より）

- 01 高橋：ん、あのー、現象としましてはね、まあ、そうたいしてち、あのー、認識は違
02 いはないんですけども、しかしー、これは償却が終われば、あのー、問題はな
→ 03 くなるんだからだから循環要因だってのはちょっとですね、いい、あの、えー、こ
04 とばあー の遊びの様な感じがしますね。

「言葉の遊び」という批判を行なう際、いいよども (いい、あの、えー)、ポーズ (「ことば」の後)、笑い (下線部は笑いを帯びた発話を示す) などにより直接的な批判表現が緩和されているのが考察される。

(4) 司会者の中立放棄

次はカンボジアへの自衛隊派遣問題に関する討論の一部である。司会者の指名を受けて工藤氏が発言を開始するが、他の参加者の割り込みを受け、発言の続行が困難となる。その際司会者は中立を放棄し、割り込んだ色川氏を非難。そして工藤氏にさらに発言を続けるよう促す。

資料5 (「PKO」より)

- 01 司会： ちょっと今ね、 僕は頭が悪いんでよくわかんなかった。
北沢：田原さんね いや田原さんね、ひとつ
- 02 司会：「なにその、工藤さんの話だと、 なに、みみ「民間人がいっても、民間人が
工藤：「はい ええ 「あの、憲法
- 03 司会：行っても九条に 「違反するって／？／
工藤： 「民間人が行ってもたとえばあの武器を持って、行った場合です
？？： 「／？／

- 04 工藤：とか、あの「民間人が行ったとしてもですね、
司会：え？
姜：「民間人が行ったらどうして憲法九条の問題がでてくるんですか。」
- 05 工藤：憲法九条ってのはですね、自衛隊をっていう規定ではなくて、日本国民「全員一
行くことと一、あのー、
- 06 工藤：「が 全員あの、／？／のと あの一
色川：「自衛隊なんていう／？／から、よく憲法九条読んでご覧なさい。」
- 07 司会：そういうこと言うから感情的だって言われるの。ちょっと待って。はいどうぞ。
- 08 升添：あんまり女性をいじめちゃだめですよ。
- 09 工藤：国民、国民としてですね、全員に課せられている権利、権利、ま、義務なわけ
色川：いやいや、女性じゃない。法学士だ、法学士だ、相手は。
- 10 工藤：ですよ。そこで自衛隊だけに課せられている、

(5) 第三者の仲介

次は、TBS 問題に関する討論の中で、猪瀬氏と須藤氏の対立に第三者である木元氏が割って入り、対立の続行を阻止している例である。

資料6（「TBS問題」より）

- 01 猪瀬：／？／で「やっぱり
須藤：「えらそうにさー
- 02 猪瀬：えらそうにいったないよ、それはぜんぜん。「どうしてえらそうにいったるわけ？
木元： だけ「どさっきね、

03 須藤：「んー、さっきからなんかTBSがいきなり出てきて「／?／

猪瀬：「いやいやさー

「／?／

→ 04 木元：「もういいじゃない、それもー「やめようよー

猪瀬：「そのねーやっぱりニュースの基準ってのは必要ですよ。

05 木元：ちょっとわたし聞きたいことがあるん「／?／

須藤：「／?／

猪瀬：「／?／

以上、対立に伴う対人関係の配慮がさまざまな形式をとって現れることを考察した。ここでこれらの拘束のもう一つの共通点について述べておきたい。考察されたほとんど全ての拘束が対立表現／対立行為とともに、またはそれに直接先行するか続行する形で現れていることである。この点に関しては後に分析の際に再び取り上げる。

4 データと分析

4.1 データと方法論

以下の分析には、コンフリクト行為にかかる「儀礼拘束」が著しく異なった2種のデータ（討論A及び討論B）を使用する。討論AはNHK「日曜討論」で行われた「不況診断—日本のどこが病んでいるのか」と題する討論（1993年2月14日放映）より約20分のデータを、討論Bはテレビ朝日「朝まで生テレビ」の中で行われたカンボジア総選挙に関する討論（1993年5月29日放映）より約15分をそれぞれテープ録音し、文字化したものである。

分析の枠組みとしては日常会話の発話順番取り (turn-taking) システムの分析にあたって Sacks, Schegloff, and Jefferson (1974) が用いた会話分析 (Conversation Analysis) 的手法に加え、フロア (floor) や Goffman (1981b,c) の「作成フォーマット」 (production format) など相互行為の社会言語学 (Interactional Sociolinguistics) の枠組みに属する概念を取り入れる。従って会

話分析が本来目指す発話の連鎖 (sequence) の分析によるトークの構造の解明という枠にとどまらず、より広い意味での相互行為の側面に焦点を当て、発話順番取り (turn-taking) ルールとコンフリクトという機能にかかる儀礼拘束の形式との相関関係を明らかにしていく。以下においてまず、各討論の発話順番取り (turn-taking) システムについての考察を行い、その後、発話順番取り (turn-taking) ルールとコンフリクト行為にかかる儀礼拘束の関連性について考察をおこなう。

4.2 討論の発話順番取り (turn-taking) システム

まず討論 A には以下のような「司会者の話者指名によるターン分配—指名された話者による発言」というパターンの繰り返しが考察された。

資料 7

- 01 司会：…鈴木さんはどんな診断をされますか？
- 02 鈴木：わたくしはね、(2.6分) ……だと思いますよ。
- 03 司会：…ということですが、悲観派の高橋さんはいかがですか？
- 04 高橋：はい。あの一、ま、(2.3分) ……こういうふうにまあ、診断しております。
- 05 司会：鈴木さん、この、……ま、まかなり重いということですからね。
- 06 鈴木：あの一、重いことは認めますが、(1.8分) ……ねってことはあると思いますよ。
- 07 司会：高橋さん、その資産デフレの認識はどうですか？
- 08 高橋：ん、あの一、現象としましてはね、(1.5分) ……という、あの一感じがします。

以下継続

この討論では参加者は司会者に指名されたときのみに発話を開始している。つまりターン分配システムは司会者によってほぼ完全に管理されていると言える。司会者は一度に一名しか指名しないので討論参加者同士の発話には原則的にオーバーラップは生じない。従ってターンを分配され発話を開始した話者は途中で他の参加者による割り込みを受けることなく、少なくともある程度のまとまった形で話しを終え、その時点でターンは再び司会者に移行する³⁾。つまり話者交替の

³⁾ ターンが司会者に再び移行する時点で前の話者が少なくともある程度のまとまった話を終えて (Continued)

起こっている場所は発話権移行適切場所 (TRP/transition relevance place)⁴⁾であるだけでなく、討論における発言者の発言権を考慮にいった話者交替の場所であることが推測できる。言い換えると、ここでは話者は指名されたことによって発話を開始する権利だけでなく、それを途中で中断されることなく終了させる権利をも得ているように考えられ、話者は会話の最小単位と定義されるターン (turn) (Sacks, Schegloff, and Jefferson 1974) のみでなく、発言権の認められている空間と定義されるフロア (floor) (Edelsky 1993; Hayashi 1991) を保持する権利を得ていると推測できる⁵⁾。つまりこのデータにおいて司会者は、自らもその保全に参加している「ほとんどオーバーラップのみられない発話順番取り (turn-taking) システム」によりターン分配システムの管理者および話者のフロア (floor) 保全者としての役割を維持し得ているのである。

またこの討論において司会者は、参加者へのターン分配以外に、参加者が発言を終えた後にその発言を要約するという役目もしばしば果たしているが、その際、

いるということは、その時点で話者の発話が「思いますよ／ねえ。」「こういうふうに診断しております。」「感じがします／感じをもってるんです。」などあるまとまった内容の話しを終えたことを意味する表現によって終了していることから判断できる。

⁴⁾ Sacks, Schegloff, and Jefferson (1974) 以来、相互行為における発話の単位であるターン (turn) を構成するターン構成単位 (TCU / turn-constructive units) は基本的に統語的単位 (syntactic units) であるとなされ、単位が完結する場所は発話権移行適切場所 (TRP / transition relevance place) と呼ばれてきた。Ford and Thompson (1996) は TRP は統語的にのみ完結する場所ではなく、音調的 (intonational)、語用論的 (pragmatic) にも完結する場所であることを論証し、CTRPs (Complex Transition Relevance Places) として捉え直す必要性を説いている。

⁵⁾ このことは、指名によって発話権を獲得した話者が発言続行中に他の討論参加者の割り込みを受けたとき、司会者が割り込み者の発話を遮ったり、発言続行中の話者にのみその発言続行を支持するシグナル (continuer / Schegloff 1982, turn-internal backchannel / Maynard 1986) を送るなどして発言続行中の話者の発言権を保護しようとする行動をとることが他のデータで考察されたことから支持される。また同様の考察は以下の討論 B の分析にもとりあがる。

⁶⁾ Goffman (1981b, c) は「作成フォーマット」(production format) および「参加フレームワーク」(participation framework) という枠組みを呈示し、相互行為の参加者を話し手 (speaker) と聞き手 (hearer) に分類するという大雑把で不十分な方法を再考する必要性を説いた。つまり話し手 (speaker) の役割に関しては、「発声体」(animator — 音声媒体の役目を果たす人、つまり話す人)、「作者」(author — その信条や心情の創作者)、および「本人」(principal — 媒体者によって伝達される信条や信条を有する人) に分解する必要を説き、さらにトークの中の世界に登場する人物を表す「登場人物」(figure) という概念も紹介した。状況によっては同一話者がこれら 4 役全てをこなす場合もあるが、必ずしもそうとは限らず、また、話者はその役割を変化させることによりフットイング (footing — 相互行為への参与姿勢、スタンス) をシフトさせることもできる。テレビ討論においては上記 4 概念のうち前者の 3 概念が関わっており、司会者は通常、他者 (author) によって創造された他者 (principal) の有する見解を伝える媒体機関 (animator) に徹

(Continued)

あくまで発声体 (animator) (Goffman 1981b, 1981c) としての役割に徹し、個人的な見解を述べてはいない。すなわち終始司会者としての中立を保っている⁶⁾。

一方、討論Bにおいては討論Aにおいて考察されたような規則的パターンは見られない。たとえばこの討論における一典型的な発話順番取り (turn-taking) システムが観察される以下の部分を見てみたい。

資料 8

- 01 司会： ちょっと今ね、 僕は頭が悪いんでよくわかんなかった。
北沢：田原さんね いや田原さんね、ひとつ
- 02 司会：「なにその、工藤さんの話だと、 なに、みみ「民間人がいっても、民間人が
工藤：「はい ええ 「あの、憲法
- 03 司会：行っても九条に 「違反するって／？／
工藤： 「民間人が行ってもたとえばあの武器を持って、行った場合です
？？： 「／？／
- 04 工藤：とか、あの 「民間人が行ったとしてもですね、
司会： え？
姜： 「民間人が行ったらどうして憲法九条の問題がでてくるんですか。
- 05 工藤：憲法九条ってのはですね、自衛隊をっていう規定ではなくて、日本国民
「全員行くことと一、あの一、
- 06 工藤：「が 全員あの、／？／のと あの一
色川：「自衛隊なんていう／？／から、よく憲法九条読んでご覧なさい。

することにより、その中立の立場を維持している。

一方聞き手 (hearer) に関しては、Goffman はまず「正規の聞き手」(ratified) と「非正規の聞き手」(unratified) に分類している。「正規の聞き手」はさらに直接「話しかけられている聞き手」(addressed) と「話しかけられていない聞き手」(unaddressed) に分けられ、「非正規の聞き手」は悪意のある「盗み聞き」(eavesdroppers) と偶然居合わせた「立ち聞き」(overhearers) に分けられるとしている。本考察では「聞き手」の役割に関する分析は行っていないが、討論の視聴者の役割を分析する際等にこれらの概念が有効と思われる。

→ 07 司会：そういうこと言うから感情的だって言われるの。ちょっと待って。はいどうぞ。

08 升添：あんまり女性をいじめちゃだめですよ。

09 工藤：国民、国民としてですね、全員に課せられている権利、権利、ま、義務なわけ
色川：いやいや、女性じゃない。法学士だ、法学士だ、相手は。

10 工藤：ですよ。そこで自衛隊だけに課せられている、

ここでは参加者は司会者に指名されて発話を開始する (03行-工藤) 以外に、指名によって発話権を獲得した話者の発言中にその発話に割り込む形で自発的に発話を始動している (04行-姜、06行-色川)。司会者は基本的には発話者を指名する形でターンの分配を行っている (01、02、03行-司会) が、割り込みによって参加者間の発話にオーバーラップが生じた際には、割り込み者を阻止し、割り込まれた話者を再指名することによって中断された発話者に発言を続行する機会を与えている (07行)。すなわち頻繁に起こるオーバーラップにより「司会者の話者指名によるターン分配—指名された話者によるフロア (floor) 保持」という討論 A に見られた図式は崩れ、指名により発話権を得た話者のフロア (floor) はその保護を約束されることはないが、同時に他の討論参加者がより自由に発言権を得ることが可能となっている。

討論 A と比較した場合のもうひとつの相違は司会者の中立に関するものである。討論 A において発声体 (animator) の役割に徹することにより中立の立場を保持していた司会者はここでは「僕は頭が悪いんでよくわかんなかった」(01行)、「そういうこと言うから感情的だって言われるの」(07行) など個人的な見解を述べることによりその中立の立場を放棄している⁷⁾。

⁷⁾ 「僕は頭が悪いんでよくわかんなかった」という発言により、司会者は animator から animator + author + principal に footing shift することにより animator に徹することで維持してきた中立の立場を放棄している。同様に「そういうこと言うから感情的だって言われるの」という発言によっては animator + principal に footing shift している。なお footing の概念に関しては (注 6) 参照のこと。

4.3 発話順番取り (turn-taking) システムとコンフリクト表現の相関関係

このセクションでは前セクションで考察を試みた発話順番取り (turn-taking) システムと先に述べたコンフリクトに付随する表現の関連性を明らかにする。まず前のセクションの考察から明らかになった点を以下にまとめてみる。

表 1	討論 A	討論 B
オーバーラップ	ほぼ皆無	頻繁
ターン分配システム	司会者がほぼ管理	司会者は部分的に管理
司会者の中立性	完全に保持	部分的に放棄

また先に例をあげた 5 種類の対人関係的配慮表現の使用頻度を討論ごとにまとめてみると以下ようになる。

表 2	討論 A	討論 B
(1) 間接的対立表明	◎	△
(2) 見せかけの同意による前置き	◎	△
(3) 緩和マーカー	◎	△
(4) 司会者の介入 (中立放棄)	×	◎
(5) 第三者の仲介	△*	◎

(頻度の高い順に◎、○、△。×は例が皆無だったケース)

討論 A においては「間接的対立表明」、「見せかけの同意による前置き」および「緩和マーカー」が頻繁に見られ、「司会者の介入」と「第三者の仲介」はほとんど見られなかった。討論 B においてはほぼ反対の結果、つまり討論 A ではほとんど考察されなかった「司会者の介入」と「第三者の仲介」が多く見られ、討論 A で頻繁に考察された残りの 3 種はあまり考察されなかった。また討論 A においてはこれら対人関係的配慮はほとんどの場合反対表明を行った話者自身によってなされ、討論 B においては本人以外の者 (司会者または他の討論参加者) によってな

*△とあるが考察されたのは一ケースのみ。また割り込みによる仲介ではなく司会者を介してなされたもので、この場合例外として扱うことも可能である。

された。

まず討論Aにおいては上に述べたようにターンの分配は司会者によってほぼ完全に管理されており、参加者は司会者に指名された場合のみ発話権を有し、それを行使している。つまり司会者によって指名された参加者はその発言を全うすること、つまりフロア (floor) を保持することが原則的に保証されていることになる。しかしこのオーバーラップのみられない発話順番取り (turn-taking) システムは話者のフロア (floor) を保護すると同時にコンフリクトにかかる対人関係の配慮表現の種類をも規制しているのである。つまり討論Bにおいて主要な表現方法となっている第三者の介入は、たいていの場合割り込みによって行われるので、討論Aにおいてはほとんど実現しないことになる。また討論Bにおいては指名された発話者のフロア (floor) を保護するために行使される司会者の中立放棄も、発話者のフロア (floor) が保護されているこの討論では行使の必要はない。司会者をも含めた他者の仲介を受けられない連鎖 (sequence) 構造を持つこの討論において、コンフリクトにかかる儀礼拘束は、それがコンフリクト表現そのものに、またはそれに直接先行または続行する形でかかるという拘束のもとでは、コンフリクトを生み出した話者本人がコンフリクト表明時にあわせて表明するというのが原則的には唯一の方法となる。従ってこの様な環境においては「間接的対立表明」、「見せかけの同意による前置き」そして「緩和マーカー」という上記の原則的条件を満たす種類の表現方法が多用される結果となっている。

一方討論Bにおいては、司会者はターンの分配者としての機能を失っていないが、分配のシステムを完全にコントロールするには至っていない。討論参加者は司会者の指名を受けない場合でも自由に討論に割り込み自ら発話権を獲得している。このようにより自由に発話権を獲得することが可能な環境は、司会者にもターン分配以外の役割のために自らターンを獲得し、発話を行使することを可能とする。その一例として割り込みによって中断された指名話者の発言を司会者が保護する例が考察された。つまりオーバーラップが頻繁に生じる発話順番取り (turn-taking) システムによって生み出されたコンフリクトは、そのコンフリクトを生み出したまさに同じシステムによって可能となった司会者の中立性放棄や第三者の割り込みによって儀礼拘束がかけられ、そこにテレビ討論という公共的 (institutional) なコンテクストによってかかる「システム拘束」だけでなく、対人関係の配慮に関わる文化相対的規制である「儀礼拘束」も含めてコンフリクトの秩序が維持されているのである。討論Bにおいては討論Aに頻繁に見られた

3種の「儀礼拘束」の行使も構造的には可能であり、実際にそれらの例も観察された。しかし割り込みという発話順番取り (turn-taking) システムを操作する方法で生み出される主要なコンフリクトへの配慮行為は、同じく発話順番取り (turn-taking) システムを操作する方法でなされる司会者の中立放棄や第三者の介入による場合が主に見られたのである。

5 まとめ

本論では日本のテレビ討論をデータに討論参加者の対立表明に伴って考察された5種類の対人関係の配慮を示す規制と討論の発話順番取り (turn-taking) システムの関連性についての考察を行い、討論のターン構造がその討論に表れる対人関係的配慮を示す表現方法を拘束している事実を明らかにした。まず司会者の基本的な役割である討論参加者へのターンの分配の考察を通して、司会者がターンを分配された発話者の発言の保護、つまり発話者のフロア (floor) の保持というもうひとつの重要な役割を有していることがわかった。

そしてオーバーラップがほとんど見られずターン分配がほぼ完全に司会者によって管理されている発話順番取り (turn-taking) システムを持つ討論Aにおいては、第三者の自発的ターン獲得による第三者の介入は構造的に起こり得ず、またそれによって発言中の話者のフロア (floor) が脅かされる可能性もないことからそれを救うために司会者が自らの中立を放棄して介入する必要もなく、したがって司会者の介入、第三者の仲介という形の対人関係の配慮は起こらないことも明らかになった。反対に割り込みが起らず第三者の仲介がうけられないこの討論では、これらの配慮も対立を表明した本人によって対立表明示に示されるのが原則的に唯一の方法となることから、「間接的対立表明」、「見せかけの同意による前置き」そして「緩和マーカー」という形の本人による表明が頻度の高い例として考察される結果となった。一方オーバーラップが頻繁に生じる発話順番取り (turn-taking) システムを有する討論Bにおいては、第三者の割り込みによる発言者への反論が多く考察されたが、この場合、まさに割り込みを可能にしたその同じシステムのもと可能となった司会者や第三者の仲介により対立への対人関係の配慮が示されていることが考察されたのである。

対面相互行為、そしてその秩序は、複雑な網の目のように絡み合うさまざまなコンテキストにより異なる規制を受け、作り上げられている。本考察ではそのな

かのひとつである発話順番取り (turn-taking) システムという相互行為のより普遍的な構造的側面が、討論に表れるコンフリクトにかかる対人関係の配慮を示す行為をどのような形で規制しているかを考察した。言い換えると、対人関係の配慮という社会文化的コンテクストによって生み出された規制が別のレベルではターン (turn) 構造というより普遍的なコンテクストによって別の規制を受け、相互行為の秩序がそこにつくりあげられているプロセスを考察したわけである。

社会言語学、とくに対面相互行為秩序の解明を目的とする談話分析の分野においては、コンテクスト (context) はつねに主要な概念とみなされてきたが、同時に明確な定義付けがなされないまま今日に至っている。現在はむしろコンテクストの一義的な定義付けは不可能であり、分析のレベルによって異なった概念が適応されるという見解 (Duranti and Goodwin 1992) が受け入れられるようになっているが、本考察においても、このコンテクストの重要性とその一義的にはとらえられない面を例証することができた。今後も絡んだ網の目をひとつひとつ解きほぐす地道な作業を続けることによりコンテクストの重層性および相互行為の全体的構造の解明を目指したい。

トランスクリプション表記

<u>下線</u>	笑いを帯びた発話
—	母音がのばされて発音されている箇所
(1.0)	ポーズ (1 秒以上)
空白	ポーズ (1 秒以内)
「	オーバーラップ
/ ? /	聞き取り不可能な箇所
→	分析の対象となる発話

参考文献

- Brenneis, Donald. 1988. Language and disputing. *Annual Review of Anthropology*, 17: 221-237.
- Cook, Haruko Minegishi. 1990. The sentence-final particle *Ne* as a tool for cooperation in Japanese conversation. *Japanese/Korean Linguistics*, ed. by Hajime Hoji, 29-44. Stanford: The Stanford Linguistics Association.

- Clayman, Steven E. 1988. Displaying neutrality in television news interviews. *Social Problems*, 35 (4) : 474-492.
- Duranti, Alessandro and Charles Goodwin (eds.) 1992. *Rethinking context: Language as an interactive phenomenon*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Edelsky, Carole. 1993. Who's got the floor?. *Gender and conversational interaction*, ed. by Deborah Tannen, 189-277. Oxford: Oxford University Press.
- Ford, Cecilia E. and Sandra A. Thompson. 1996. Interactional units in conversation: syntactic, intonational, and pragmatic resources for the management of turn. *Interaction and grammar*, ed. by Elinor Ochs, Emanuel A. Schegloff, and Sandra A. Thompson, 134-184. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goffman, Erving. 1981a. Replies and responses. *Forms of talk*, 5-77. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Goffman, Erving. 1981b. Footing. *Forms of talk*, 124-159. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Goffman, Erving. 1981c. Radio Talk. *Forms of talk*, 197-327. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Greatbatch, David. 1992. On the management of disagreement between news interviewees. *Talk at work*, ed. by Paul Drew and John Heritage, 268-301. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gumperz, John J. 1982. *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gumperz, John J. 1992. Contextualization and understanding. *Rethinking context*, ed. by Alessandro Duranti and Charles Goodwin, 229-252. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hayashi, Reiko. 1991. Floor structure in conversation. *Journal of Pragmatics*, 16: 1-30.
- Honda, Atsuko. 1996. Conflict management in Japanese televised discussions, ms. Georgetown University, Washington, D.C.
- Jones, Kimberly Ann. 1990. *Conflict in Japanese conversation*. Unpublished Ph.D. dissertation, University of Michigan.
- Maynard, Senko Kumiya. 1986. On back-channel behavior in Japanese and English

- casual conversation. *Linguistics*, 24: 1079-1108.
- Maynard, Senko Kumiya. 1993. *Kaiwa Bunseki* (Conversation Analysis). Kuroshio Shuppan.
- Niyekawa, Agnes M. 1984. Analysis of conflict in a television home drama. *Conflict in Japan*, ed. by Ellis Krauss, Thomas Rohlen, and Patricia Steinhoff, 61-84. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Sacks, Harvey, Emanuel Schegloff, and Gail Jefferson 1974. A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50: 696-735.
- Schegloff, Emanuel. 1982. Discourse as interactional achievement: Some uses of 'uhuh' and other things that come between sentences. *Analyzing discourse: Text and talk. Georgetown University Roundtable on Languages and Linguistics* 1981, ed. by Deborah Tannen, 71-93. Washington, DC: Georgetown University Press.
- Watanabe, Suwako. 1993. Cultural differences in framing: American and Japanese group discussions. *Framing in discourse*, ed. by Deborah Tannen, 176-208. New York: Oxford University Press.
- Yamada, Haru. 1992. *American and Japanese business discourse: A comparison of interactional styles*. Norwood, NJ: Ablex.